

西暦 2021 年 3 月 18 日

氏 名 鄒 易 諾

題 目 姜振慶のドキュメンタリー写真の様相

※ 要 旨 2,000字程度

## 要 旨

研究者は、2017年頃より上海、大連などの中国の都市において、ドキュメンタリー写真の制作と、作家及びその作品の調査を行ってきた。調査の対象は中国の風景、風俗に関するドキュメンタリー写真で、時代は中国の改革開放以降から現代までに設定した。その理由は、中国では1980年代の改革開放により社会に大きな変革が始まり、近代化、工業化の影響で人々の暮らしやそれを支える産業が大きく発展し、それと同時に都市化が進み、街の景観や風俗までもが大きく変化したことにある。その変化の中で、現実を目にした景観を写真に記録し、特に失われていく景観を写真にとどめ、どのように作品として表現するかということに関心を持った。

改革開放が始まる1980年以前は、個人が自由に写真を撮影することは許されず、国家の意向に沿った写真のみが認められた。個人が個人的あるいは社会的目的を持つ写真の撮影ができるようになったのは、改革開放以降であり、今日までそれほど時間は経過していない。このような撮影ができるようになるのと並行して、中国では個人の自由な活動や産業活動が盛んになり、社会に大きな変革をもたらされた。

本研究が対象とするドキュメンタリー写真は、中国の近代化とそれに伴う景観の変化を記録するものであり、それは数十年もの間、エアポケットのように放置され、今後、急速に消失すると思われる古い建物やそこに住まう人々の暮らしを記録するものである。このような変化は、上海や北京など中国を代表する大都市はもちろん、研究者の故郷である大連にも起こっている。大連は中国東北地方の中心都市であり、19世紀以降、ロシアや日本が統治した歴史があり、それらの国が建設した独特の建築物が残っているが、こうした建築物やそこでの住民の暮らしも急激に失われつつある。

このようなドキュメンタリー写真への関心や大連への思いの中で、大連在住の写真家姜振慶（キョウ シンケイ）に出会うことができた。姜振慶の代表作である『海岸』は、1992年から2012年にかけて、大連近郊の海岸地方を継続的に取材し、その景観と人々の暮らしの変化を写真に収めている。これらの写真には、本研究のドキュメンタリー写真の制作において、大きな示唆を与えると考えた。

姜振慶は、現在68歳（2020年7月）と健在であり、彼の写真を正しく理解することが、自身のドキュメンタリー写真の制作、研究に必要と考え、直接会ってインタビュー調査を試みた。写真家姜振慶は、中国でも著作や記事などが少なく、日本にも紹介されていないことから、本研究を通して姜振慶の作品や写真作家としての彼の活動を紹介することは日本のドキュメンタリー写真の発展にも寄与すると考えた。また、彼の作品の研究や彼のインタビュー調査を通して、ドキュメンタリー写真とはどのようなものか、彼独自の撮影技術やテーマを明らかにすることで、研究者の作品制作に生かしていくことも目的にしている。